metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University R

エスニシティの測定論（2）*

── サンドバーグとフィニーの試み ──

金　　明　　秀**

1　はじめに

エスニシティ[1)]とは何か──もう三十年ほども前、この問いをめぐって活発に論争が交わされた時期がある。エスニシティというまだ新しい現象と言葉について、多くの研究者がその正体を掴みかねていたころのことだ。エスニシティの本質についてずいぶん活発に仮説的な論考が提案されては批判された。しかし、今から振り返ってみると、エスニシティという一つの言葉に、各論者が銘々に異なる定義を与えている状況では、いくらお互いに熱意をぶつけあおうとも、生産的な議論になるはずがなかったのである。

1980年代に入ると、ジェイムズ・マッケイ［McKay 1982］などが争点の外延を整理する図式を示したことによって、ひとまず雰囲気として論争は収束した。つまり、双方の論点を容れる折衷派が主流を占めるようになったのだが、エスニシティという概念が未整理のままであった以上、議論は収束しただけにすぎず、解決したわけではなかった。その証拠に、1990年代以降、構築主義と本質主義をめぐる論争に触発される形で、またぞろ70年代とほぼ相同の議論が繰り返されるようになった。エスニシティに関連する研究は、その量も質も過去30年間にいちじるしく向上したが、もっとも重要でもっとも基礎的なはずのエスニシティという概念については、いっこうに議論が体系化されていないということだ。

その主たる理由は、エスニシティに関して定評のある操作的定義がなく、信頼性と妥当性を備えた測定指標が開発されていないことにある、というのが私の意見である。が、それを詳述するのは別の機会に譲ることにして、本稿では、同様の問題意識からエスニシティの測定論を試みた二人の研究者の希少で貴重な業績を紹介することにしたい。

2　サンドバーグの先駆的指標

エスニシティを測定する試みは客観的出自重視アプローチ、帰属意識重視アプローチ、行動重視アプローチに大別される［Smith 1980］。このうち、エスニシティの可変性、多様性を正確に測定するためには、行動重視アプローチを採用するしかないことは論理的に自明である［Waters 1990］。にもかかわらず、エスニシティ研究を主導してきた社会学、文化人類学分野において、行動重視アプローチに基づく研究はとても少ない。ほとんど存在しないと表現しても過言ではないほどである。

しかしながら、この分野においても例外的に行動重視アプローチを採用した研究がある。すなわち、ニール・C・サンドバーグ[2)]が実施したサーベイ群である［Sandberg 1974，1981］。

サンドバーグは、エスニシティの内実をまず理論的に文化的エスニシティ、民族的 national エスニシティ、宗教的エスニシティという 3 要素に分

*キーワード：エスニシティ、測定論、多重指標
**関西学院大学社会学部准教授

1）現在の米国で ethnicity といえば帰属対象となる ethnic　group のことを指すが、本稿においてカタカナでエスニシティと表現しているのは米国でいう ethnic identity に近い。

2）ロヨラ・メリーマウント大学ロサンゼルス校の社会学教授、兼、集団関係訓練所の所長（当時）。南カリフォルニアのユダヤ系社会でリーダー的役割を長年務めた。

表１　文化的エスニシティの指標

P	The public school should teach more about the contributions of Polish people to America.
W	The schools should teach more about the contributions of Welsh people.
K	日本の学校は、在日同胞の存在意義をもっと教えるべきである。
P	Organizations which carry on the Polish culture are important.
W	Giving support to the national Eisteddfod is important.
K	在日同胞の文化を維持するための取り組みが必要である。
P	Polish music makes me want to dance.
W	Welsh music makes me want to sing.
K	同胞の民族音楽を聴くと踊りたくなる。
P	Southern California does not need a Polish newspaper.
W	We need newspapers that carry articles in the Welsh language.
K	在日同胞が運営するマスコミが必要である。
P	We don't need centers where our young people can learn about the Polish culture.
W	We need centers where our young people can learn about the Welsh culture.
K	若い在日同胞が民族文化を学べるような場所が必要である。
P	We don't need to know the history of the Polish people.
W	We need to know the history of the Welsh people.
K	民族の歴史を学ぶことは必要だ。
P	We should be willing to give money to preserve the Polish tradition.
W	We should be willing to give money to preserve the Welsh culture.
K	在日同胞の文化を維持するためには、喜んで投資すべきである。
P	Our children should learn Polish dances and music.
W	Our children should learn Welsh music and songs.
K	こどもたちには、民族の踊りや歌を教えるべきである。
P	It is too bad that the Polish tradition is not being carried on by many of our young people.
W	It is too bad the Welsh tradition is not being carried on by some of our young people.
K	民族的な伝統を身に付けていない若者がいることはとても残念なことだ。
P	Our children should learn to speak Polish.
W	Our children should learn to speak Welsh.
K	こどもたちは母国語を勉強すべきである。

節化し、それぞれ10個の指標を策定して多元的に測定を試みている。

なぜ３要素なのか、それらがなぜ文化的、民族的、宗教的要素なのか、といった課題についてはあまり説得的には語られておらず、発見的なものといってよいだろう。また、それぞれのエスニシティについて明確で厳密な定義も書かれておらず、理論的には洗練された業績であるとはいいがたい。しかし、３要素それぞれについて、研究対象となる民族集団の特性が様々な角度からたいへん丁寧に描写されており、経験的に妥当なアプローチであることが示唆されている。

研究対象となる民族集団とは、ポーランド系アメリカ人［1974］と、ウェールズ系イギリス人［1981］である。この２者のエスニシティについては、別々の測定指標が開発されたものの、共通する質問項目も多い。そこで、ポーランド系アメリカ人の指標にP、ウェールズ系イギリス人の指標にWという記号を付し、対応関係にある指標を上下に並べ、３つのエスニシティごとに分類整理したのが表１～３である。ただし、民族的エスニシティの指標（表２）の中には、PとWに対

表２　民族的エスニシティの指標

P	We don't need stronger organizations to express the views of Polish-Americans.
W	We need stronger political organizations to express the views of Welshmen.
K	在日同胞の意見を表明するための、もっと強い組織が必要である。
P	A feeling for the Polish people is "in the blood."
W	A feeling for the Welsh people is in the blood.
K	同胞どうしが求めあう感情は、民族の血である。
P	I feel more comfortable with Polish people.
W	I feel more comfortable with Welsh people.
K	日本人といるときよりも在日同胞といるときのほうが落ち着く気がする。
P	If you're in trouble, you cannot count on Polish people to help you.
W	If you're in trouble, you can only count on Welsh people to help you.
K	困ったときに頼りになるのは、在日同胞である。
P	It is better to marry someone of you own nationality.
W	It is better to marry someone who is Welsh.
K	在日同胞は同胞どうしで結婚すべきである。
P	You can be for your own people first and still be a good American.
W	You can be for your own people first and still be a good Britisher.
K	帰化によって日本国籍を取得した人も、在日同胞の一員として生きるべきである。
P	I would vote for a Polish political candidate rather than any other nationality regardless of political party.
W	I would vote for a Welsh political candidate rather than any other nationality regardless of political party.
K	なし
P	A Polish neighborhood is a friendlier place to live. It is not all right to change your name. Polish jokes bother me.
W	Wales should have more independence from England. It is important to express pride in being Welsh. Making Welsh food is a tradition that should be carried on.
K	祖国の統一にはもはや関心がない。 民族としての誇りを持って堂々と本名を名乗ることは重要である。

応関係がないものが含まれているため、それらは表の最後にまとめて記してある。また、表３の宗教的エスニシティについては、もともとＰとＷに対応関係が一切ない。宗教実践には民族集団間の多様性が大きすぎて、共通の指標を作ることは困難だということであろう[3)]。

なお、各指標を翻訳する代わりに、在日韓国人男性を対象に実施した調査［金 1997］にサンドバーグを参考に作成された指標があるため、それにＫという記号を付して記載した。直訳どころか意訳ですらない項目も含まれるが、異なる民族集団に質問項目を応用する場合の苦労を知る上で参考になるだろう。

さて、サンドバーグは、実際の分析においては、エスニシティを３つに分節化する理論の妥当性をデータ内在的に特定する作業をいっさい怠たっている。先験的に各指標をエスニシティの３要素ごとに加算するという乱暴な手続きをとっており、計量的に参考になるところはほとんどない。彼の指標や手続きをそのまま援用する研究者もいるが［e. g. Roche 1982］、それは、指標としての信頼性と妥当性を不問に付すだけでなく、エ

3）このように、同一指標による比較が困難になるところが、行動重視アプローチの難しいところである。

表３　宗教的エスニシティの指標

P	I feel more comfortable in a Polish church. Polish religious education is not important for our children. Our people should get their families to the Polish church on Sundays. You should belong to the Polish church even if it is far from your home. The Polish religious tradition helps to strengthen my family life. I would rather attend a Polish Mass at Christmas. Polish jokes bother me. It is important for me to contribute my time, talent, and finances to the Polish church. I should not encourage others to belong to the Polish church. I prefer a church where services are in the Polish language.
W	Welsh religious tradition strengthens my family life. I prefer a church where services are in the Welsh language. Welsh religious education is important for our children. The preacher's Hwyl (Hoyle) moves my emotions. Welsh people have a spiritual nature. The Christian tradition strengthens my Welsh heritage. I should encourage others to participate in my church. A spiritual revival would be important for Wales. Christian unity is important to the Welsh people. Welsh hymns make me want to cry.
K	チェサなどの民族的風習は、民族的なやり方を守っていくべきである。 チェサを若い人たちに教えることは重要である。 盆と先祖の命日にはかならずチェサをすべきである。

スニシティの構造を探索するという重要な課題を残したままであることを意味する。パーソナルコンピュータが発達する前という時代の制約はあるとしても、因子分析どころか、加算に先立って α 係数の算出すら行われていないことは、方法論に問題がないとはいいがたい。

しかしながら、サンドバーグは、客観的出自や帰属意識を測定する単純なアプローチから抜け出せずにいた当時の研究状況の中にあって、初めてまとまった多重指標を用いて多元的に概念の測定を試みた人物である。その先駆性において、間違いなく画期的な業績であったといえる。また、指標がすべて心理学的「態度」の次元に統一されている点では、後述の心理学者フィニーの指標 MEIM よりもむしろ概念的にスマートな面がある。異なる民族集団の成員でも、固有の宗教実践以外は共通の指標によってエスニシティを測定できる可能性があることが示されたことも大きな成果である。付け加えると、計量的に信頼性と妥当性が確認されていないという先述の問題についても、後続の研究者が対応すればよいのであって、サンドバーグの指標が本質的に抱えている問題とは必ずしもいえない。

こうした点を考慮するなら、サンドバーグの指標は今よりももっと高く評価さてよい。エスニシティを行動重視アプローチで測定する場合、近年、フィニーの MEIM が用いられることが多いが、調査対象や調査テーマによっては、サンドバーグの指標を検討してみるべきであろう。

３　フィニーの MEIM

冒頭で、多くの分野のエスニシティ研究において行動重視アプローチがほとんどみられなかった、と述べた。しかし、行動重視アプローチによるエスニシティの計量研究が突出して発展している学問領域が一つだけある。発達心理学だ。中でも、もっとも幅広くレビューされている指標がジーン・S・フィニー[4]による MEIM である［Phinney 1992；Roberts *et al.* 1999］。MEIM とは Multigroup Ethnic Identity Measure の略であり、「多民族アイデンティティ測定尺度」とでも

4）カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、心理学部教授（当時～現在）

訳せようか。

この研究の前提となっているのは、「個々の民族集団がそれぞれ固有の歴史と伝統と価値観を持つとしても、ある集団に帰属しているという意識は全人類に共通のものではないのか」[Phinney 1992] という心理学者らしい着想である。この着想を具体化するため、フィニーは、行動重視アプローチの欠点、すなわち異なる民族的集団で同一の設問を利用することが難しいという問題を克服することを試みてきた。

前述の通り、発達心理学領域においては、個々の民族集団においてエスニシティを測定しようとした研究は少なくない。しかし、黒人のアイデンティティを測定するときは政治的態度、メキシコ系アメリカ人なら言語、アジア系アメリカ人なら文化的態度が重要視される [Phinney 1990] ような状況では、「結果を比較対照することができない。しかも、一般現象としてのエスニシティなるものを測定して研究できるのかという基礎概念にかかわる疑義をまぬがれなくなる」というわけだ [Phinney 1992]。

そうした観点から MEIM が作成された以上、その最大の長所は多くの民族集団に共通して適用できるということである。しかしそれに加えて、背景となる理論的検討が緻密に行われているということも、MEIM の大きな特徴であるように思われる。フィニーが理論的に依拠しているのはタジフェルらの社会的アイデンティティ理論とエリクソンのアイデンティティ論だが、一足飛びに理論を演繹的に適用するのではなく、先行研究を詳しく整理したうえで [Phinney 1990]、エスニシティの心理学的構成要素を帰納的かつ網羅的に概念化している [Phinney 1992]。帰納的なアプローチを併用した結果、後述するように指標間にやや概念的な不統一が生じているが、にもかかわらず MEIM が幅広い支持を得ている理由は、こうした一連の理論的検討により内容的妥当性が高度に確保されているためであろう。

図 1　PHINNEY [1999] より修正版 MEIM（多民族アイデンティティ測定尺度）

それぞれの意見に対して、あなたがどれくらい賛成するか反対するか、以下のうちから当てはまる番号を選んでください。（4）とても賛成、（3）賛成、（2）反対、（1）とても反対

① 私は、歴史、伝統、慣習といった自分の民族集団のことをさらに学ぼうと時間を使ってきた。
② 私は、同胞集団の人が大部分を占める組織や社会集団で活発に活動している。
3 私は自分の民族的出自と、その自分にとっての意味について、明確な自覚を持っている。
④ 私は自分の人生が同胞集団のメンバーシップにどのように影響するかよく考える。
5 私は自分が同胞集団の一員でよかったと思う。
6 私は自分の同胞集団に所属しているという強い自覚がある。
7 私は同胞集団の一員であるということが自分に与える意味をとてもよく理解している。
⑧ 自分の民族的出自をもっとよく知るために、私はほかの人と自分の同胞集団についてしばしば話をすることがある。
9 私は自分の同胞集団と、同胞集団が成し遂げてきたことに、つよい誇りを抱いている。
⑩ 私は、民族の特別な食事、音楽、慣習といった同胞集団の文化を実践している。
11 私は自分の同胞集団に強い愛着を感じる。
12 私は自分の文化や民族的出自を心地よく感じる。

注）○の付いていない見出し数字は「愛着と帰属」因子の負荷が強い指標群、○数字は「探求」因子の負荷が強い指標群。

図1がMEIMの具体的な指標群である。MEIMは1992年に公表された時点では14項目（やや強引な一因子構造）であったが、1999年にロバーツらとの共同研究で因子構造を再検討した結果、2項目を削除して二因子構造を採用することで落ち着いた［Roberts *et al. op.cit.*］。

フィニーは第1因子を「愛着と帰属」と呼ぶ。その内容は、「民族集団へのコミットメントと帰属意識、プライドと好感情によって構成されるエスニック・アイデンティティ」である。フィニーは、この因子を社会的アイデンティティ理論の文脈に位置付けることで順当に解釈している。

一方、第2因子は「探求」と名付けられており、アイデンティティ探求の3項目（1、4、8）と行動の2項目（2、10）から構成されている。その意味は、「個人が探索し、学び、民族集団に関わりあっていくプロセス」であるという。第1因子の項目が心理・主観的な要素であったのに対して、こちらは行動や実践を尋ねる項目群だといえる。

ところで、第1因子の指標群が心理・主観の次元であり、第2因子の指標群が行動・実践の次元であるとすれば、これらが別々の因子を構成するというのは当たり前の結果だともいえる。あるいは、（社会学者であればともかく）心理学者である以上、もともと意識と行動という次元の異なる項目群を同一の因子分析に投入することは適切でないという批判もありうる。にもかかわらず、フィニーがあえてこれらの次元を混在させている理由として、2つのことを指摘することができる。

第一に、フィニーがエリクソンを理論的支柱の一つとしていることである。フィニーは、エリクソンを引用しつつ、アイデンティティ形成というのは動的な探求プロセスであり、エスニック・アイデンティティの形成にも同じことがいえると主張する［Phinney 1992］。静的な意識項目の次元だけではくみ取ることが困難な概念を調査テーマにしている以上、それを測定する指標も当然、動的な内容にならざるをえない。

第二に、フィニーは、これらの2因子が理論的にも統計的にも明白に弁別される一方で、両者に強い相関関係があるということを強調している。本文に明記されているわけではないが、意識と行為が不可分の形でらせん状に影響しあい、結果としてアイデンティティを形成していく以上、片方だけを取り上げるのはナンセンスだということであろう。

フィニーのMEIMは、発達心理学分野において非常に幅広く支持を受け、さまざまな民族集団に応用されたり、新たなエスニシティ測定指標の土台として活用されたりしている。エスニシティ研究において、現在までのところ、間違いなくもっとも成功した尺度だといえる。

4　議　論

前号（「エスニシティの形成論（1）」、以下、金［2009］）でも述べた通り、エスニシティを測定する上で論理的にはもっとも有効なはずの行動重視アプローチは、発達心理学分野を除いて、これまで採用されることは非常に少なかった。特定の民族集団を対象とした測定の試みはわずかに見られるものの、エスニシティという一般現象を測定するために指標を洗練させ、体系化しようという目的を持った研究となると皆無といってよかった。

なぜ行動重視アプローチが忌避されてきたのかは明らかではないものの、複数の民族集団に共通する指標を作成することが困難であるということは、主要な理由の一つであろう。とりわけ、フィニーも指摘するように、行為や実践については、多民族に共通の質問項目を設けることは至難の業である。民族言語一つをとっても、日常的に使用している民族集団から、いくつかの単語や慣用句以外ほとんど使われていない民族集団まで幅広くばらつきがあり、どの民族集団にも共通する指標を作成するのは不可能に近い。そのような研究アプローチが、勝算がないという理由で忌避されてきたとしても不思議ではない。

しかしながら、研究の“芽”がまったくなかったというわけでもない。本稿では、そのことを示すために、日本の社会学分野ではあまり知られていない二人の研究を紹介した。少しでも、後続の研究者の参考になれば幸いである。

最後に、金［2009］と本稿の関連について述べ

ておきたい。

金［2009］のアプローチと分析結果が、フィニーらの研究［Roberts *et al. op.cit.*］とたいへんよく似ていることにお気づきであろうか。すなわち、（1）エスニシティは意識と行為を包括する概念として定義され、その反映として測定指標が意識と行為を含むこと、（2）因子分析の結果、同胞集団との情緒的紐帯を求めようとする因子と、民族的な問題を意識し、それを解決していこうとする主体的な因子に分節化されること、（3）エスニシティが上記２つの志向性に統計的に分節化されると同時に、両者には強い相関関係が認められること、である。

この相似には、我々の研究結果が一般性を持ちうる傍証を得たという感慨と、その一方で、我々がさらされてきた批判をフィニーらも免れまいという懸念を抱かされている。

「我々がさらされてきた批判」とは、例えば“実体としてエスニシティが意識と行為を含む包括的な概念であることは理解できるが、学術的には概念の混乱と見なさざるをえない。意識と行動は別々に分析すべきではないか”といったものである。

そうした批判を受けて設計したのが、「在日韓国人の社会成層と社会意識全国調査」であった［金 1997］。同調査では、エスニシティの測定指標として２つのアプローチを併用した。すなわち、表１～３に示した通りサンドバーグの指標と、金［2009］とほぼ同じ指標の両方を調査項目に含めたわけである。

その結果、何がわかったか。信頼性と妥当性において、サンドバーグとフィニーのどちらが優位に立ったのか。より豊かなインプリケーションを得られる指標はどちらなのか。――これらの問いについては、また稿を改めて詳述したい。

文　献

金　明秀、2009「エスニシティの形成論（１）―在日韓国青年意識調査から―」『関西学院大学社会学部紀要』第108号

金　明秀編、1997『在日韓国人の社会成層と社会意識全国調査報告書』在日韓国青年商工人連合会

PHINNEY, Jean S., 1990, “Ethnic identity in adolescents and adults: A review of research,” *Psychological Bulletin,* 108.

PHINNEY, Jean S., 1992, “The Multigroup Ethnic Identity Measure: A New Scale for Use with Diverse Groups,” *Journal of Adolescent Research,* Vol. 7, No. 2.

ROBERTS, Robert E., PHINNEY, Jean S., MASSE, Louise C., CHEN, Y. Richard, ROBERTS, Catherine R., ROMERO, Andrea, 1999, “The Structure of Ethnic Identity of Young Adolescents from Diverse Ethnocultural Groups,” *The Journal of Early Adolescence,* Vol. 19, No. 3.

ROCHE, John 1982, “Suburban Ethnicity: Ethnic Attitudes and Ethnic Behavior Among Italian Americans in Two Rhode Island Suburban Communities,” *Social Science Quarterly* 63.

SANDBERG, Neil 1974, *Ethnic Identity and Assimilation: The Polish-American Community,* Praeger Press.

SANDBERG, Neil, 1981, *Identity and Assimilation: The Welsh-English Dichotomy, A Case Study,* University Press of America.

SMITH, Tom. W. 1980, “Ethnic Measurement and Identification,” *Ethnicity,* Vol. 7.

WATERS, Mary C. 1990, *Ethnic Option: Choosing Identities in America,* University of California Press.

Measurement of Ethnic Identity（2）: Indices of Sandberg and Phinney

ABSTRACT

The purpose of this paper is to introduce precedence research, which is not well-known among sociologists in Japan, of the measurement of ethnic identity with the behavioral approach. Neil C. Sandberg [1974, 1981] had developed 30 indices to measure three dimensions of ethnicity: cultural ethnicity, national ethnicity, and religious ethnicity. It was a pioneering achievement where he adopted the behavioral approach and measured ethnic identity with multiple indices. Sociologists at that time couldn't escape from using the old-fashioned nativity and subjective approaches. Jean S. Phinney [1992] developed the Multigroup Ethnic Identity Measure (MEIM) which can be used with all ethnic groups. Most research on ethnic identity had focused on the unique elements that distinguish a particular ethnic group from another. The MEIM had the support widely in the developmental psychology field, and it has been applied to various ethnic groups. The MEIM has been shown to be the most successful measure of ethnicity so far in this research field. Each work has a peculiar feature and aptitude. Implications for future research are discussed.

Key Words: measurement of ethnicity, behavioral approach, multiple indices